

遠見裸眼視力検査

目的

- ・裸眼での日常の見え方の確認
- ・屈折異常や眼疾患の予測

準備物 0.1字ひとつカード・視力表・ペンライト・検鏡枠・遮閉板(アイパッチ)

視標 1.0 の高さに被検者の眼の位置を合わせ片眼を遮閉する

通常右眼から、遮閉しても両眼開眼させて測定すること。通常幼児や緊急の場合は必要な眼からの場合もあるが、臨機応変に！両眼で見ていないか？眼を細めていないか？をチェック！中心で見えない場合はそのコメントを！

YES 視標 0.1 が過半数見えるか？

NO

視力 0.1 以上

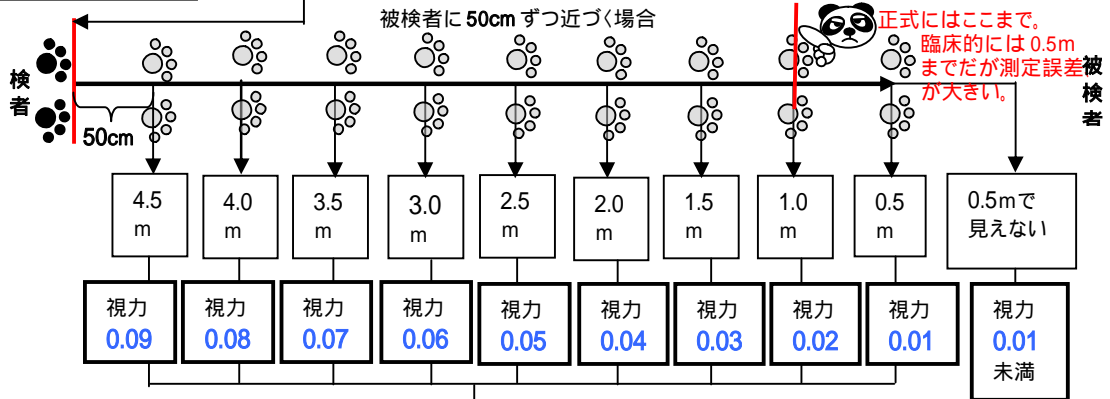
視力 0.1 未満

視力値は低い方から順次高い方へ過半数が見える最小の視標が得られるまで測定する

測定時間は 2 秒以内を目安に。切れ目が縦のみ、横のみだけが特に判る場合はコメントを！

斜めは出さないこと。通常、検者が近づくと(これの方が早い)視力表のラ環は大～小の方向へ読んでゆくので、近くから遠くへ離れて行った方が良いという説もある。また調節の関係で離れてゆくのは良くないという説もある。

ランドルト環 0.1 視標が過半数見える距離まで 50cm ずつ近づくと、見える距離から見えない距離まで離れる



判定基準) $視力 = 0.1 \times \text{被検者から見た距離(m)} / 5$

判定基準)

5 列の場合 3/5 以上
3 列の場合 2/3 以上
(本により 1/2 や 3/4 以上となっているものもある)

過半数見える最小のその視標が視力値

結果・記載例)

R.V.(v.d.) = 0.5
L.V.(v.s.) = 0.8

自分の結果を書いておこう！

参考

字ひとつカードの提示の仕方の注意点

1. 必ず上・下・左・右の4方向とし斜めは出さず、1つの視標について縦・横は網羅して次の視標に進むこと。
2. 被検者に方向を変えている途中を見せず、方向を悟らせないようにすること。
3. 被検者の眼の高さに視標を提示すること。
4. 視標カードの持ち方は、体に対していつも同じ持ち方にし、視標の切れ目の位置を悟らせないようにすること。

特に幼児の場合

1. 幼児の場合は比較的提示時間をゆっくりとするが、原則は 2 ~ 3 秒とすること。
2. 誉めたり励ましたりして、意欲を持たせるようにすること。
3. 眼鏡枠を嫌がる場合、アイパッチにシールを貼ったりして工夫をすること。
4. 指差しや口答で方向を答えることが出来ない場合、ハンドル法にて行うことも考慮すること。

3 本、5 本と指の数をかえて答えさせて確認する。YES

指数弁

結果・記載例)

見えた距離 / n.d., c.f., F.Z.
例) 20cm で正答した場合
20cm / F.Z. (上方にて)

教科書に準じ独語のみを大文字とする。
1m / n.d. は 0.02 に匹敵するよ。

・位置をかえて判別できる箇所を捜す。
・縦・横に動かしたり止めたりしてフェイントをかけて手の動きが判るか確認する。

YES

手動弁

結果・記載例)

見えた距離 / m.m., h.m., H.B.
例) 10cm で正答した場合
10cm / m.m.

眼前で行い、距離を書かない場合もある。

YES

・明室で不明なら必ず暗室で確認してその旨を記載する。
・瞳孔が縮小するかを見る。
・光を点滅させて光が判るかを確認する。

光覚弁

結果・記載例)

s.l.(+), l.s., L.S.

上下左右から光を瞳孔領に投射して光の有無とその方向が判別できるか？

NO

結果・記載例)

s.l.(-), null 又は 0

n.d. ; numerus digitorum m.m. ; motus manus s.l. ; sensus luminis
c.f. ; counting finger h.m. ; hand motion l.s. ; light sense
F.Z. ; Finger Zahl H.B. ; Hand Bewegung L.S. ; Licht Sinn

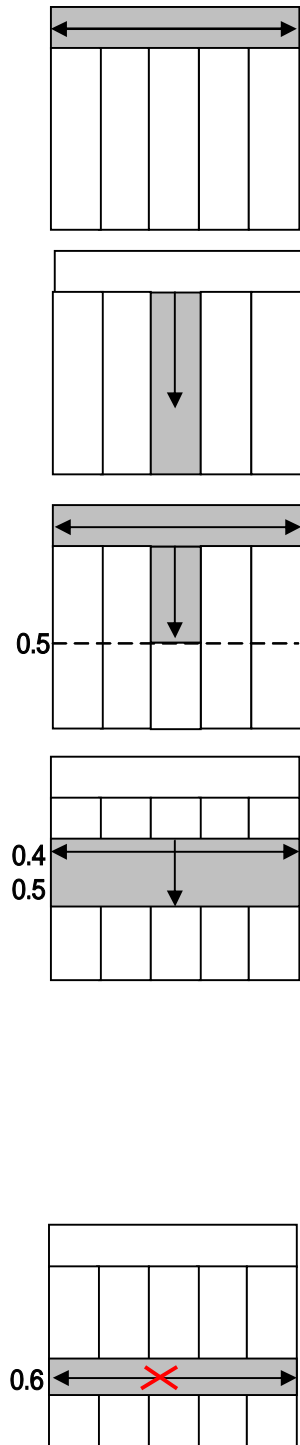
臨床での裸眼視力検査例



目的

視力検査を素早く行う方法

準備物 視力検査器



視力表の照明が縦に点灯するなら利用しよう！

片眼を遮閉する

0.1の視標が過半数答えられるか？

NO

0.1未満の視力検査方法へ

YES

上 下に縦方向に順にランドルト環の切れ目を答えさせる

例)

0.5の段で返答に詰まった！

その段の1、2段上のランドルト環を横に答えさせる

例の場合、0.4の段。

YES

過半数OKか？

NO

例の場合、0.5の段。

次の段を横に答えさせる

半数未満の段まで同様に進む

例)

0.6の段で半数以下になった！

例の場合、0.6の段。

その1つ上段が裸眼視力値

例の場合、0.5の段。

パンダの場合、ずっと答えない時、半数以上でもP(partial)をつける。実際のPの使用法は1つでも読めたら、その段の視力値にPをつけることされている。しかし正式には使用しない。



補足

厳密にやる箇所と省略して良い箇所をみきわめること！！

上から順に縦にランドルト環の切れ目を答えてもらい、答えに詰まった箇所の1、2段上のラ環から、今度は横に厳重に測定してゆく。測定法では過半数正解であればOKとなっているが、迷いながらの答えとずっと答えた者とは差があるので、パンダは迷いながらの答えの場合、1つの段を少なくとも6回以上は確認し、過半数以上だと思った時点(わざわざ何回正解したかは数えなくて良い)で次の段階に進む。